

# FLORA KANAGAWA 23

神奈川県植物誌調査会ニュース 第23号

Jan. 15.

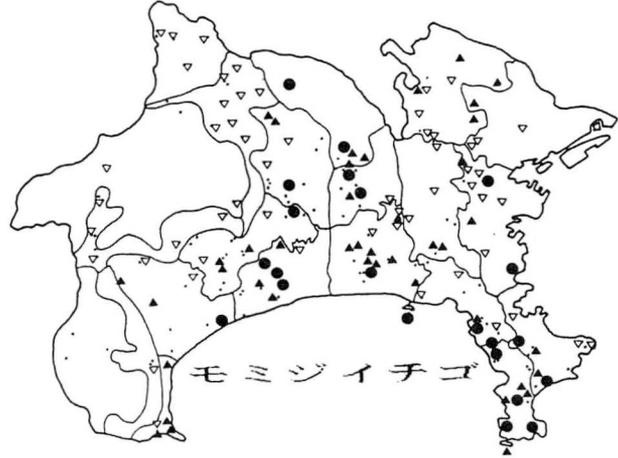
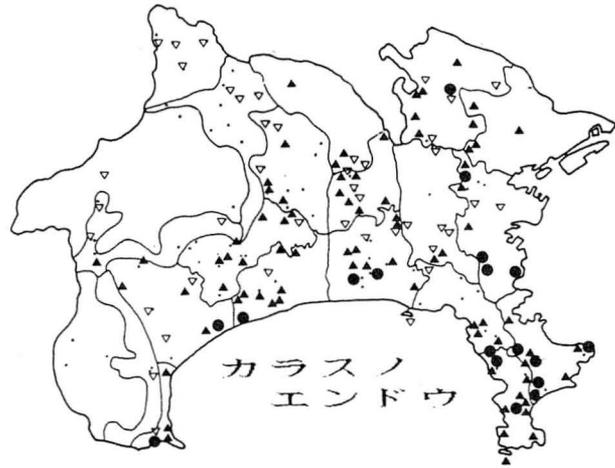
231 横浜市中区南仲通5-60 神奈川県立博物館内

1987

神奈川県植物誌調査会・振替 横浜 3-10195

## 4種類の植物の開花状況

▽: 未開花 ▲: 咲き始め ●: 満開 ■: 咲き終わり □: 若い実



## ● 開花季節調査について

○神奈川の春はどこから来るか '86の中間報告

昨年に引き続いて今年も4月5~7日に県下一斉の開花季節調査を行いました。54名の会員の方が参加して下さい、204地点で記録を取ることができました。結果の整理は湘南ブロックのボランティアの方々をお願いし、基本的な集計は終わっているのですが、開花指数の計算方法や分布図への表示の仕方で迷っている点があり最終的なまとめにはもう少し時間がかかりそうです。

中間報告としてオオジシバリ、カラスノエンドウ、アケビ、モミジイチゴの4種類について開花状況を地図にまとめてみました。この地図には各地点でもっとも開花の進んだ株の状態がプロットされています。昨年の調査で明らかになった、三浦半島の春が早いという傾向が今年の結果にもはっきりと現れています。

※調査参加者(順不同、敬称略)

森百合子・諏訪哲夫・北川淑子・大森庄次・岩田実・大場達之・高橋秀男・武井尚・藤野知弘・蒔田かをる・羽野雅子・住吉静子・浜口哲一・斎藤滋子・三輪徳子・守矢淳一・佐々木あや子・樋田五百枝・山口育子・山本明・宅見啓・長岡侑・小座間国雄・内藤美智子・根本平・

早川亮太・斎木操・大森雄治・城川四郎・米山智恵子・中村真子・勝山輝男・勝山恵美子・吉川アサ子・萩原恭一・勝山智男・黒沢一之・村上司郎・平松俊子・内田光雄・長谷川義人・西山清治・鈴木慶司・八田羽栄一・谷恵子・松岡幸子・石渡宏・浜中義治・石渡治一・鈴木一喜・サークルいそぎく・鈴木美恵子・石井藤太郎・大前悦宏

○継続的な植物季節調査にとりくんでいる方へ

4月から有志の方に、それぞれのフィールドで開花や結実の記録を取って頂いていますが、そろそろその結果を全体で整理してみたいと思います。

野帳をなるべく早く下記までお送り下さい。手元でデータの整理をしている方は、どんな紙でも結構ですから下記のような様式でまとめておいて下さると、大変助かります。

なお年間を通した調査でなくても、データは十分役に立ちますので、数日間の野帳でも是非お送り下さい。また野帳のコピーを希望される方はその旨書き添えて下さい。(浜口哲一)

## ● 湘南～県西地区方面のシダ調査

### その1

昨年(昭和60年)の年末から今年の年始にかけて、県西地区の箱根巢雲川(畑宿付近)流域と奥湯河原の未採集稀産のシダを、かつて何度となく訪れた記憶を頼りに探しに出かけた。

巢雲川流域では、アオネカズラ・ヒロハヤブソテツを確認し、絶滅してしまったと思っていたミドリカナワラビも2株の幼苗をようやく探しだし、偶然にもタニイヌワラビの立派な1株を発見することが出来た。また奥湯河原では、アケジ川蛇懸の滝上流の谷を登り詰め、見事に育ったミドリカナワラビの小群落、数か所に出会い、かつてオオヒメワラビの大群落であった地点も、2～3枚の葉が残っていたので、その地を確認することが出来た。しかし、一番目標にしていたタキミシダ・ヒメサザラン・カラクサシダ等の貴重なシダのあったワサビ田は、荒廃して跡形もなくなってしまったのか、20数年の歳月を経た今日では、遂にその場らしき跡さえ探し出すことが出来なかった。

### その2

今年度に入り、日本シダの会々員である大磯町在住の田中一雄氏より、一回目には湘南地区、二回目には県西・県北地区の未採集と思われるシダ標本、合わせて600枚を超える多量の寄贈を受けた。

田中氏は、現在特に神奈川県西部の相模湾流入の各河川流域毎のシダ植物を調査中で、精力的に各河川の流域をくまなく歩き回っていられるので、今まで県内では確認されていなかったり、また極めて稀なものまで含め未採集品を多数提供していただいた。

特に県西・県北地区では、今回の調査では未採集であると思われるコバノイシカグマ・タカオイノデ・ネッコイノデ・イヌイワヘゴ・アイトキワトラノオ・イヌイワヘゴ等をはじめ、稀産のイヌイワガネソウ・フモトカグマ・クジャクフモトシダ・オオキジノオ・キジノオシダ

・トキワトラノオ・ミヤコイヌワラビ・フジオシダ・ハコネオオクジャク・ナガバノイタチシダ・コシダ等が含まれ、各メッシュ20～50種に及ぶ増加ぶりである。

1. MIA-1ではタニイヌワラビ・コハシゴシダ・ミドリベニシダ・サイゴクベニシダ・フジオシダ等45種(内35種は増加分)……以下( )内は増加分。

2. MIA-2では、オオキジノオ・サイゴクベニシダ・ハコネオオクジャク・エンシュウベニシダ・ギフベニシダ等41種(32種)

3. MIA-3では、ホソバイヌワラビ・ミドリベニシダ・オオヒメワラビ・ウラジロ等56種(25種)

4. YU-2では、オオキジノオ・キジノオシダ・タカオイノデ・サイゴクベニシダ・ミドリベニシダなど62種(35種)

5. MANでは、クジャクフモトシダ・フモトカグマ・コハシゴシダ・コシダ等69種(19種)

6. MATでは、コバノイシカグマ・メヤブソテツ・ホソバイヌワラビ・オシダ・オオキヨズミシダ・ナガバノイタチシダ・ムクゲシケシダ・ミヤマクマワラビ等54種(49種)

7. OD-1では、コシダ・コバノイシカグマ・オオキジノオ・ナガバノイタチシダ・ミドリカナワラビ・サイゴクベニシダ・ギフベニシダ・アオハリガネワラビ等81種(51種)

8. OD-4では、コウヤコケシノブ・コバノイシカグマ・イヌイワヘゴ・オオキジノオ・ミヤコヤブソテツ・ミドリベニシダ・サイゴクベニシダ・ネッコイノデ・アイトキワトラノオ・トキワトラノオ等101種(45種)

9. YA-7では、オオキヨズミシダ・ギフベニシダ・オオヒメワラビ・ビロードシダ等38種(24種)

なお田中氏の手元には、まだ整理中の他メッシュの標本が多数用意されているので、近日中には三回目の寄贈が予定されている。(平塚市 守矢淳一)

## ● 新しいフィールドで

昭和60年11月に、横浜市金沢区から伊勢原市に越して来たので、今年から湘南ブロックの仲間入りをさせていただくことになった。既に伊勢原地区の1, 2, 3は、守矢先生が担当なさり、ISE-1, 946点、ISE-2, 643点、ISE-3, 732点の採集結果があげられていた。先生は他のメッシュも担当されていらっしゃるの、その御努力には頭の下がる思いで、私など他地区からの転入者が出る幕ではないと思った。しかし、折角、丹沢大山の麓の自然に恵まれたフィールドに引っ越して来たのだからと、大山の阿夫利神社下社までは、三回位は行ったのだろうか。ほとんどがリストアップされていて、キクザキイチゲ、ミヤマネコノメ、タチガシワ、オカスミレ位の成果で、他にヌカボシソウ、トウゴクサバノオ、ユリワサビ、シコクハタザオ等も見られた。黄色の鮮やかなヒメレンゲの群、オオギカズラの群生は見事であった。秋の花も見に行きたいが、いずれまた訪れてみよう。住まいのあるISE-2地区は水田が多く、果樹園もあり、西北部に若干丘陵地が残っているが、住宅が多くなってきたようだ。先ず地図とにらめっこ、未採集のリストを作成、見当をつけて出かけても既に採集済みのものばかり、なかなか穴を埋めるのは容易ではない。年間の開花状況調査のフィールドに選んだ高森の緑が丘公園付近と、東富岡のふじやま公園付近にはしばしば出かけたお陰で、ヒトリシズカの群落やキツネノカミソリの群生に出会い、キンラン、ギンラン、エビネ、ウラシマンソウ、ムラサキマムシグサ、ナツトウダイ、ヒメミカンソウ、ツルニンジン、シロバナハンショウズル、ジャケツイバラ、キセワタ、トモエソウ、メハジキ(一部重複)等が得られた。

横浜の金沢区に比べて一年足らずの観察の結果は、

### 1. 水田の植物

ウキクサ類、アゼテンツキ、ミズガヤツリ、イヌホタルイ、オモダカ、コナギ、ヒルムシロ、ミソハギ、ホソバヒメミソハギ、ムラサキサギゴケ、ミゾカクシ、コオニタバコ等が普通に見られる。

2. 珍しい植物としては、イヌクグ、ヤドリギ、ツルドクダミ等の収穫があり、オドリコソウの群落や、オトコヨモギがどこにでもあるのは意外に感じた。

3. 帰化植物もご多分にもれず入り込んでいるが、土地が広々としているので、ブタクサ、オオブタクサ、アレチウリ等が所嫌わず繁茂している様子は、恐ろしくらいだ。しかし中には珍しいナガミヒナゲシ、ナヨクサフジ、イヌカミツレ、ムカゴオオウシノケグサ等に出会い、マルバルコウソウ等も可愛い赤い花をふりかざして大繁茂して、結構目を楽しませてくれる。

4. 団地の芝生にも、イネ科の植物と競争して、カヤツリグサ科のヒンジガヤツリを筆頭にコゴメガヤツリ、チャガヤツリ、カヤツリグサ、ヒメクグ、テンツキ、ヒデリコ等が生え、スミレとかチチコグサ等も生えていた。

5. 1985年3月の仮目録までは、横浜地区でケツクサの項目は無かったが、既に湘南地区にはゾロリと出ている。「苞の外面に長白毛のあるものをケツクサと言ふ」と図鑑に出ている。探してみたらあちこちに有る。他地区にも、きっとあることと思われる。今後もツククサに出会う度に、苞の毛を調べてみようと思う。

(伊勢原市 内藤美知子)

新住所 〒259-11 伊勢原市高森5-8-405

電話 0463-92-0291

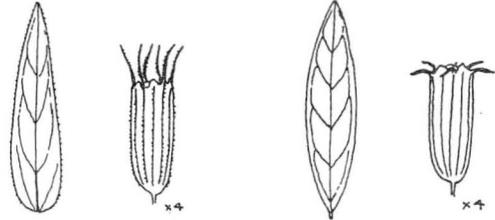
## ● エゾミソハギについて

昨年冬、湘南植物誌の編集のために標本を見直していたところ、ミソハギの包の中に少し感じの違うものを見つけた。第一印象はちょっと毛っぴいかなと思ったのだが、調べてみると、これはエゾミソハギとすべきものであった。

ミソハギとの区別が容易で、葉の基部が広まってやや茎を抱くこと、枝・葉のへり・がくなどに毛状の突起が多いこと、がくの付属片が長めで針状に直立することを確かめればよい。

この標本は守矢先生が大磯町西小磯で採集されたもので、神奈川県下からは多分初記録と思われる。その後も気にしていたのだが、今秋、平田寛重氏から同定を依頼された中に、伊勢原市上粕屋産のエゾミソハギが見つかった。案外広く分布しているものかもしれないので、皆さんの注意をお願いしたい。

ところでミソハギそのものも神奈川県の水田地帯のは自生と言えるのだろうか。畦道の一角に数株がまとまって生えていることが多く、盆花として使うために植えられた場合が多いように思う。ショウブ等と同じ状況である。植物誌刊行の際にはその辺の事情にもぜひ筆をさいていきたいものである。  
(浜口哲一)



エゾミソハギ(左)とミソハギ(右)の葉とがく

## ● OD-1 で イヌノフグリ 発見

4月24日、湘南地区のメンバーで、小田原市風祭から水之尾にかけて調査をした。前年の秋、11月7日に同じメンバーで塔之沢から塔ノ峰に登り、水之尾を通って風祭に下りたが今回はそのコースと一部だぶることになる。

箱根登山鉄道の風祭で下車、国立箱根療養所東側の抜け道を登る。遅い桜の花見を楽しみつつ、今回は塔ノ峰の頂上でドシャブリに会い、泥にまみれて下ったことを思い、今日の汗ばむような好天に感謝する。

要採集種をメモした紙きれを頼りに、セイヨウタンポポ、ヤブタバコ、ヒメウス、チドメグサ、ツメクサなどを採集し、住宅地を抜け水之尾へ、塔ノ峰の登り口までの間でイワガネゼンマイ、トウゴクシダ、ミツデウラボシ、マダケ、メダケ、オカメザサ、ヒメカンスゲ、ケスゲ、シラコスゲ、ミミガタテンナンショウ、ウラシマソウ、ツルボ、キツネノカミソリ、ゴヨウアケビ、ヤマネコノメソウ、アカネスミレなど採集。午後は、リストに不足している水田植物を探そうと、同じ道を少し引き返し、小さな田んぼが階段状にまとまってある谷戸に入る。タガラシ、ムシクサなど普通のものが未採集である。皆で目を皿にして探してムシクサをやっと一本見つける。

タガラシは無し。土地の方に湿田の有無をたずねると、この辺にはもう無いとのこと残念だが諦めた。土手にカントウタンポポと競って咲くオカオグルマが印象的だった。10数本ずつ数カ所に見られた。イヌゴマ、アカミタンポポも採集。

菖蒲に通ずる広い道に出た所で、「あった」と守矢先生。イヌノフグリだ。ピンクの花も実もつけている。一段高くなった畑のフェンスの下、2m位の間に5~6株確認した。標本を守矢先生が、浜口さんは写真で記録。山口さん、米山さんと私の3人は初対面。今では凶鑑でしかお目にかかれない花と思っていたので嬉しかった。守矢先生は1949年頃平塚で、その後2、3年後に逗子で、最近では1984年京都でと今回が4度目。浜口さんは20年位前に千葉で見られたそうで2度目とのことであった。

ここでOD-1の調査を終え、交通量の多い道を小田原駅へ。駅前でひと休みし、皆で30余種採集を確認して解散となった。

参加者：守矢淳一 浜口哲一 米山智恵子 山口育子  
三輪徳子 (茅ヶ崎市 三輪徳子)

## ● 小田原市入生田にて

去る4月、入生田(OD-1)の

以前宮ヶ瀬の林の中で見たことのあるベニシュスランを見つけました。まだ花には早かったので、家に持ち帰り、鉢に植えて花の咲くのを待って標本にし、県博へ提出しました。

その後どうなっているかと、9月12日、時折小雨の降る中を、再度見に行っていました。

林の中ではハグロソウやキツネノマゴがピンクの花を沢山咲かせていましたし、ムカゴイラクサ、シュウブ

ソウ、ツルボ、ノブキ、ゲンノショウコなどの花が目につきました。

ベニシュスランは健在で、数株に増えていました。近くにもっとあるのではないかと、まわりの林の中を少し探してみましたが、見つかりませんでした。

流れのそばには、メヤブソテツが数株ずつ二ヶ所にあり、ミドリカナワラビ、アマクサシダ、ミツデウラボシ、コバノヒノキシダなどが見られました。

その他当日採集した主なものは、ヘビノネゴザ、クリハラシ、イワガネゼンマイ、ヒメミカンソウ、コミカンソウ、コケオトギリ、ハグロソウ、ハダカホオズキ、ダンドボロギク、ベニバナボロギク、ネジバナなどです。

(平塚市 山口育子)

## ● 湯河原地区の調査活動

大観山、城山トンネル、城山を結ぶ稜線、更に城山の稜線の先を海岸の湯河原高校に延長した線の西側がYU-1、東側全域がYU-2である。

YU-1には温泉の湧出箇所が多く、温暖な気候と適度の湿気がシダ類の生育に適し、その種類の豊富なことは周知の通りである。

1984年度まではYU-1の担当者が定まっておらず、またYU-2においても女性一名のみ。従って里の調査が主となり、植物の宝庫を抱えながら、気を揉むばかりであった。ところが1985年5月より平塚博物館の浜口先生、シダの大家、守矢先生および湘南地区のベテラン調査員、斎木、斎藤、三輪、山口様達の積極的調査により急速に進展した。私も昨年夏より同行させていただき、また本年度は内藤様も加わり心強いことである。

1985年12月22日には県博の合同調査がYU-1不動の滝付近の植物と藤木川流域におけるシダを対象に行われた。ちなみに現在までシダ類はYU-1約95種、YU-2約96種が採集されており、YU-1には尚50種以上の存在がメモされている。(1986.9.20現在)

湯河原には2本の河川がある。YU-1の藤木川(下流で千歳川となる)とYU-2の新崎川である。以前は広範囲に田圃も存在していたが、東海道新幹線工事の排出土で埋められたり、また残りも昭和40年代初期にはすっかり姿を消してしまっただけでなく、もと田圃跡にヒデリコ、タマガヤツリ等を見かけ、その生命力の強いのに感激したものである。新崎川の河口近くの中洲にはオランダガラシ、ミゾソバ、ヨシ等が繁茂している。

次ぎに最近の湯河原における調査例を記す。

### A. YU-2 標高500m付近の調査

時：1685年9月12日

所：鍛冶屋に属する白銀林道(標高450~530m)11.5 km、明るい南向き斜面につけられた道。

参加者：浜口、斎木、三輪、山口、米山

この高さに見られた主な植物

13イヌシダ 18ヒメシダ、ミゾシダ 200ヒメガマ、コガマ 209ノガリヤス、オガルカヤ、コスズメガヤ、スズメノヒエ、ハイヌメリ、メガルカヤ 209.5ハコネダケ 212ヒメドコロ 220オオバギボウシ、ヤマユリ、コオニユリ、ヤマホトトギス 303ネコヤナギ 306オオバヤシ ャブシ 307クリ 309ヒメコウゾ 310ミズ、アオミズ 314カナビキソウ 319ネバリタデ、イタドリ 325フシグロ 329フサザクラ 331イヌシヨウマ 345ダイコンソウ、ヤマテリハノイバラ、クサボケ、クマイチゴ、ニガイチゴ、エビガライチゴ 346ヤブマメ、ジャケツイバラ、マルバヤハズソウ、ハイメドハギ、マルバハギ 347タチフウロ 351カラスザンショウ 360ヌルデ、ハゼ 365ホソエカエデ、エンコウカエデ、ウリハダカエデ 371サンカクヅル 373カラスノゴマ 376サルナシ 382コバノキブシ 383コガンビ、サクラガンビ 387ウリノキ 390ミズタマソウ 31アリノトウグサ 395ミシマサイコ、オオチドメ 396ヤマボウシ、ミズキ 410ヒイラギ、オカイボタ 41フジウツギ 415ネナシカズラ 419イヌトウバナ、イヌコウジュ、セキヤノアキチョウジ、ヒキオコシ、キバナアキギリ、ツルニガクサ 420マルバノホロシ 421シオガマギク、コシオガマ、ヒキヨモギ 423ナンバンギセル 429エノシマオオバコ 431ツクバネウツギ 433オミナエシ 435キカラスワリ 436ツルニンジン 438シラヤマギク、ヤブタバコ、ガングビソウ、ダンドボロギク、カセンソウ、ヤマニガナ、マルバダケブキ、ハナヤクシソウ、ハンゴンソウ、タムラソウ、コメナモミ、ハバヤマボクチ、リュウノウギク

他にハマエノコロ×エノコログサを思わせるような姿のエノコログサを見かけた。茎は這っていないが穂はまん丸である。また三島に多くあるので名づけられたと言うミシマサイコの自生もかなりの個数を見かけた。この高い山道にコガマ、ヒメガマの群生も意外であった。

### B. YU-2 林床植物の調査

時：1986年5月29日

所：幕山浄水場入口(標高200m)よりしとどの窟(標高450m)へ至る常緑樹、落葉樹混生の比較的暗い道

参加者：守矢、斎木、内藤、三輪、山口、米山

このコースの主な植物

12コウヤコケシノブ、ハイホラゴケ 13ハコネシダ 18ハカタシダ、キヨタキシダ、ハクモウイノデ、イノデモドキ、ハリガネワラビ 207コカナダモ 209タチカモジダサ 210ヒメカンスゲ、ジュズスゲ、テキリスゲ、カンスゲ 219ナベワリ 220オモト 305オニグルミ 307イヌガシ 310ウワバミソウ、ヒメウワバミソウ 316オトメアオイ 339ヤマハタザオ、オオバタネツケバナ 343コアジサイ、ガクウツギ、ミヤマネコノメ 345マメザクラ 346ジャケツイバラ 348ミヤマカタバミ 355シラキ 362ツリバナ 365チドリノキ 368ミヤマハハソ 370クマヤナギ 380ナガバノスミレサイシン、コミヤマミレ 395オカウコギ 396ハナイカダ 402コンリョウソウ 410ミヤマイボタ 412フデリンドウ 414キジョラン、フナバラソウ 421ミゾホオズキ、クワガタソウ 424イワタバコ 430シロバナイナモリソウ 431コバノガマズミ 433オトコエシ 438キッコウハグマ、ヒメヨモギ、テバコモミジガサ

沢すじに30cm位に伸びた根生葉があり多分ボロギクであろうと、開花時標本にと持ち帰った。8月20日頃開花。オトコエシに化けていた。おかげで育ての楽しみと命名の由来が勉強出来た。ほろ菊?さにあらず。古代武具の指物にソボロと言うのがあり、この竹細工の束に頭花が似ていることによると言う。古人の発想は優雅であるが、音感が根になる。今はサワギクと呼ばれているようだ。また根生葉がボロギクとオトコエシとはよく似ているとの記載もあった。(原色日本植物図鑑)

昨年5月20日高山線より林中に黄花を見かけ、その鮮やかな色が胸に焼き付いてから一年経った。今年の同じ頃、湯本(HAK-5)で川向いにまた見かけた。ところが今年度は道端の眼の前に咲いていたのである。ジャケツイバラと教えていただく。茎には棘が多くまた茎の横が蛇が結ばれたように見えることから名づけられたと言う。掃途の椿ライン(YU-1)の沢にも数カ所咲いていた。YU-1にはまだ標本は無いがとも入り難いような沢である。

### C. YU-1 南部沢すじの調査

時：1986年6月26日

所：万葉公園西北部一帯(西山橋~桜橋)

参加者：守矢、斎木、内藤、山口、米山

出合った主な植物

2ヒカゲノカズラ 11コシダ 13マツザカシダ 18ホソバカナワラビ、リュウメンシダ、ニシキシダ、ハシゴシダ、ミドリヒメワラビ、オニヤブソテツ 209アオカモジグサ 224ハナミョウガ 309ヒメコウゾ 310カタバヤブマオ、ナンバンカラムシ、アオミズ 316オオバウマノスズクサ 319アキノウナギツカミ、ギシギシ 334アオツヅラフジ 339ミヤガラシ 341マルバマンネングサ、メキシコマンネングサ、オカタイトゴメ 345リンボク、ヤマテリハノイバラ 346マルバヤハズソウ 351カラスザンショウ 405ミヤマタゴボウ 419アオジソ 421ミゾホオズキ 428ハエドクソウ 429ヘラオオバコ 430カギカズラ 431ソクズ 436ヤマホタルブクロ 438ムラサキニガナ、シュウブソウ

目標のコシダと稀にしか出合わないヒカゲノカズラを林の縁に、またせせらぎの近くにはカギカズラ、リンボク、ハナミョウガ等の暖地性植物が顔を揃えていた。

野外調査で思うことは、眼を閉じればそれぞれの植物の生育地が浮かび、未知の植物との出会いの嬉しさ、後日参考書と首っぴきする楽しさ、分かった時の喜び、山野や人間界に多くの知己を得、老いをも忘れさせてくれる素晴らしい調査会なりと。

(足柄下郡 米山智恵子)

## ● 雑木林を散策して

神奈川県植物誌の調査に参加して、早いもので、七年になります。私の住む秦野の自然を四季折々の草木に目を向けながら歩くことは、調査とは別に、楽しみでもあります。

秦野は、丹沢山塊の山足部に当たり、丘陵地には、雑木林を散策する機会が、たやすく得られます。そして、雑木林といわれるコナラやクメギなどの林を調べてみると、思いの他、沢山の草木を見ることが出来ます。

### ○ 雑木林に生育する植物の数

どれほどの種類の植物が雑木林といわれるコナラやクメギ、シデなどの林で生育しているだろうか、調査地点を決めて調べてみました。20m×20mの方形を決め、その範囲内で見られる植物種をすべてリストアップするという方法をとってみました。

秦野市内各地、20ヶ所での総出現種数は、285種の多数にのぼる。平均出現種数は70種と多く、この全出現種数、平均種数は、他の群落一神社の森といわれる常緑樹林やスギ、ヒノキの人工林と比較すると、かなり多くなっています。担当した秦野4区でのFlora数500余種の実に半数以上にのぼる種を雑木林の中で見ることができるといわけです。

なぜ雑木林がこのように種類数が多いのか、それは、二次林である雑木林は、草原から常緑林への遷移の途中に位置し、落葉樹を中心としながらも、人の手の加わり方により、一年生草本から多年生草本の草原要素や次期の遷移段階の常緑樹林要素を合わせ持っているためと考えられます。

### ○ 生活型の割合

調査した20ヶ所の雑木林の総出現種類を生活型別に分けてみると、常緑の草木9%、落葉樹30%、多年生草本51%、一年生草本7%、その他、針葉樹、ササ類3%とい

う割合になっていました。意外にも、落葉樹林である雑木林も、落葉樹の種類数は3分の1以下ということになります。

### ○ 姿を消しつつある植物

草原要素と常緑樹林要素を合わせ持つ雑木林は、その林床の植物も多く、早春から晩秋まで、次から次へと花を開いていきます。

しかし季節を選んでくれた花々の中には、次第にその数を減らしていく種も少なくない。最近の野草ブームも加わり、根こそぎ掘りとられてしまうものも見られます。とりわけ、ランやユリの仲間は、繁殖力も低く、また、芽生えより数年の後花を付けるものなので、最近ではすっかり影をひそめてしまった。

もう一方の原因は、雑木林そのものが変化してきたためと考えることができます。それは、私たちの生活変化に伴い、雑木林の役割が変化してきていて、10年～15年ごとの切り出しや秋の落葉かきなどの定期的な管理がされず、低木が繁茂し、つる性の植物が繁り、藪状になってきているため、草原性のオミナエシやリンドウ、マツムシソウなどは、自然と姿を消していく運命をたどっています。

今回の20ヶ所の雑木林総出現種数280種の中には、以前よく見かけたギンラン、エビネ、マツムシソウは、ついに入ってきてませんでした。

薪炭林等生活の有用林として位置してきた雑木林は今日では、私たちの憩いの場にその役目を変えてきている。四季折々の花を楽しませてくれるやすらぎの場をなんとかこれからも残していきたいものです。

(秦野市 佐々木あや子)

## ● 辻堂海岸のマヤラン

国道134号線の南側のトベラ林床で、1982年8月15日多数のマヤランの咲きがらを確認。翌年咲いている所を見たい為、7月より度々見に行く。ちょっと奥まった所なので一人では行けないのであるが、8月3日巾1m余、長さ5～6mの帯状に100本を超えるマヤランを見る。太陽光線も届かない薄暗い林床である。トベラの植栽されている所だが、こんな潮風の所でもマヤランは自然発生なのであろうか。1985年は数はだいぶ減っていた。ごみがあり、トベラの芽生えが多数で土もしまった感じである。1986年咲いている頃をのがし、8月10日見に行く。もう咲き終わり、淡いグリーンの実をつけていて、咲き遅れが2本ある。余りの減少ぶりに数をかぞえてみたら貧弱な株ばかり18本確認する。咲き終わりをみると、本年の地下系茎の前に昨年の、その先端に一昨年の花茎が

付いている。地下茎の先端に咲いたあとは、一歩づつ後ずさりして咲いていくのだろうか。この様子だと来年は見られるかどうか心配である。

私がマヤランを最初に見たのは1981年9月、知人の紹介で、内田先生が飯山観音でマヤランを発見され写真を撮りに行かれる時同行させてもらった折り、アズマネザサの根元から立ち上がる健康優良児のマヤランである。

辻堂海岸のマヤランとの出会いは、植物の好きな近所の方とマヤランの写真を見て雑談した後日、砂防事務所の方に聞いたと教えてくださったものである。辻堂海岸のマヤランは丈は少々こぶりが14cm位で色も余り鮮明でなく貧弱だ。飯山観音のマヤランは丈は20cm位で色も鮮明であった。

(茅ヶ崎市 斎木操)

## ● デンジソウの移植

1986年8月7日、秦野市尾尻の田に生育しているデンジソウを、市内3ヶ所に移植しました。区画整理の造成工事を間近にひかえたため、真夏でしたが、市役所の環境保全課に申し出たところ、移植することになったのです。

移植先は、次の所です。

### ○ 今泉の養魚場敷地内の一角

ここは、尾尻の隣接地で池にはわき水があります。池の縁と、隣接地の湿り気のある所に植えさせてもらいました。9月21日に見に行きましたが、健在でした。

### ○ 渋沢の峠にある水田

耕作してない三角地で、すぐそばを清水が流れ湿地になっていました。環境としては好適のように思えました。が、しかし何年か前に植えてみたというデンジソウが、

小さな葉になってほんのごくわずかだけ残っている状態だったのが気になりました。水気や日当たりのほかに、何か条件があったのでしょうか。

### ○ 震生湖

西側の波打ち際の湿った所に植えました。季節により水位が変わるのが気になりますが、人の足が入りにくいと思われる場所を選び植えてみました。8月31日に観察したときは、健在でした。

移植にあたっては、環境保全課の職員の方お二人と、秦野自然研究会の高橋さんが労をとってください、合計4名で行いました。保全課では、担当の諸星さん達が、市内の適地と思われる所をあらかじめ見回ってくださったそうです。高橋さんには、暑い中にもかかわらず、話

を聞いて快く作業に参加してくださいました。ただ、市では、移植後の維持管理には手をせせないと言われました。なかなか、すっかり安心とはいかないようです。

忙しさに紛れていて、久しぶりに尾尻の田を見に行ったら7月後半のある日、昔からここに茂っていたヤナギの木々やヨシなどが一面に切り倒されているのを見たときは、言葉では言い表せないほどのショックでした。いずれは造成されると分かっている、目の前がいざこう一変してしまうと、「さあ大変だ!」といった感じで、いたたまれなくなりました。話題にのぼっていたデンジソウについては、どうなっているのか、まず区画整理事務所に行ってみました。埋蔵文化財等に対しては、配慮するように予算化されているが、植物類については全く無く、このデンジソウがあることも初耳だとのことでした。私が驚きました。実際の埋め立て工事は、9月になったら着手すること。話しは丁寧に聞いていただきましたが、結局は「管轄外なので一存でどうすることもできない。移植のため待つよう通達があれば、その位なら…」とのことでした。

次に、環境保全課に行きました。理解してもらえらるようにと、次の物を用意して行きました。

1. デンジソウの解説の写し………牧野図鑑, 保育社図鑑より
2. 県博発行の神奈川の自然誌資料に載ったデンジソウの記事の写し
3. 現地での生育の様子の写真…\*葉が眠っているように閉じている夜の状態のもの

\*葉が開いている朝の状態のものなど

4. 61年3月発行の植物誌分布地図の写し  
神奈川の中でも貴重になっているデンジソウの生育地が市内にあるが、そこが9月には埋め立てられるので、その前に守る手だてをとって欲しいことを話しました。実際には、移植を考えるとということで、やはり丁寧に話を聞いていただけたことは、嬉しいことでした。

移植についての注意や場所について、植物誌の浜口さん、守矢先生、自然保護センターの方、もと秦野教育研究所長相原先生から、ご指導いただきました。

環境が適していれば、デンジソウは案外強い植物らしいとのこと。七沢自然保護センターでは、今年は見事に茂っているそうです。移植したデンジソウが、元気に根付くことを願います。

さて、9月19日。尾尻の田についに機械の手が入り、一帯がみな掘り返されて田の姿は失せ、デンジソウもこの地から消えました。同時に、他のあらゆる動植物も土にまぜかえされました。子供の時から馴染んできたふるさとがなくなってしまったような寂しい気がしています。そこに立って見ていると、開発のためとはいえ、大変なことを人間がしているような複雑な気持ちが、せまってきます。無数の命のことを考えてしまいます。

今回のことを通して、守りたいものは、はっきりと意志を伝えに行かなければ、形になってあらわれないのだと、改めて思いました。

自然を大切にしたいと思う気持ちを行政の中で生かす機構が、これからの社会に必要なのだらうとも思いました。各部署で個人的に気持ちはあっても、体制の中で生きなければ、反映がおくれまます。自然を貴重なものとして接する意識が、社会の中に必要だし、これからだんだん定着していくのではないかと、考えたりしました。

尾尻の中に新しく生まれる二カ所の公園に地域の自然が反映され、子供達が自然とふれあえる空間になって欲しい、デンジソウもまたその一面で生育できるようになったら、その実現を願っているこの頃です。

植物誌の会員となって、7年目になりました。いつも、大したお手伝いはできなかったけれど、この尾尻の田に観察採集にしげしげと通いながら、自然の移り変わり、時の流れをみてきたような思いがします……。

(秦野市 住吉静子)

## ● 茅ヶ崎自然に親しむ会のこと

自然に興味を持つ人が集まって茅ヶ崎の自然を見つめようと、「茅ヶ崎自然に親しむ会」が発足し、丸二年を迎えようとしています。

茅ヶ崎市北部丘陵にある清水谷戸、妙伝寺奥の谷戸、萩園相模川河川敷、柳島相模川河口の四地点を観察場所と決め観察を進めてきました。そんな中で、妙伝寺奥の谷戸は、一回の観察だけで、廃棄物終末処理場になって消えて行きました。

一方清水谷戸は、北西を奥として東南に向いて開口した谷戸で、北・西・南の三方を丘陵で囲まれ中央部は低地になっています。奥には清水が湧いており、その水が中央部の低地を湿地にしています。雑木林、杉・ヒノキ・サワラ林、湿地、埋立地と非常にバラエティーに富んだ環境を持ち、豊富な生物を守り育てているこの谷戸を最良の観察場所として、定期観察をはじめました。

会員の中から私達の観察活動を、トヨタ財団の「身近な環境をみつめよう」の研究コンクールに応募してはとの声があり、締め切り間近の一月に書類を送りました。三月末、予備調査研究チームとして応募数百四十チームの中から二十チームが採用され、そのなかから選ばれました。この二十チームの中から、予備期間中の調査研究の成果とこれからの取り組み方を審査して本研究チームに選ばれ、コンクールに入賞ということになります。

予備研究に選ばれた私達は四月から八月の五ヶ月の間、植物を中心に予備調査をすることにしました。

1. 谷戸の植物のリストアップ
2. 樹木地図作り
3. 谷戸の断面植生調査

4. 写真撮影とスケッチ
5. 植物区画調査
6. 水温調査
7. 聞き取りによる谷戸の昔の復元

以上の項目を挙げ観察をいたしました。

調査の結果を簡単に述べますと、植物種のリストアップの調査は、谷戸を環境の異なる場所六ヶ所に分け、すべての種類を調べてその中の帰化植物の種類を数えて帰化率を出しました。次の表の通りです。

	場所	植物種	帰化種	帰化率
清	南向き斜面	170種	8種	4.7
水	北向き斜面	177	6	3.4
谷	奥部	184	11	5.9
戸	ヒノキ、サワラ植林地	77	7	9
内	低湿地	97	10	10.3
	埋立地	148	22	14.9
	茅ヶ崎市全体	985	219	22.2
	茅ヶ崎市山側	843	168	19.9
	谷戸全体	307	32	10.4

谷戸内は、茅ヶ崎全体、茅ヶ崎の山側と比べても帰化植物が少なく、優占率は低く自然が残っていることが分かりました。植物の区画調査も同じような結果が出ました。調査はこれからも続けますので、種は増えます。この谷戸だけで、茅ヶ崎の山側の植物の半数が見られるのではないかと思います。茅ヶ崎では珍しい種も何種か確認しています。

带状断面植生調査は、谷戸を横断するように、南側の高い所から北側の高い所までロープを張り渡し、ロープに沿って植物種を調べました。この調査でも環境に依っての植物種の違いなどが分かりました。この調査方法はもう一步深める必要があると思います。

樹木地図作りは、スギ、ヒノキ、サワラ、タブノキ、シラカシ、クヌギ、コナラ、エノキ、ムクノキ、ケヤキ、ミズギ、クマノミズギを谷戸の白地図の上に、一本残らず、太さを計りながら落として行きました。

日当りの良い南向き斜面にはクヌギ、コナラを植え、谷戸の奥、北向き斜面には、ヒノキ、サワラを、またスギは境木にしていることが分かり、タブノキ、シラカシは幼木が育っているのに反し、クヌギ、コナラ類は若木が少なく、雑木林が放置され、照葉樹の林になりつつあるように思われました。

その他記録写真、土地の古老に依る谷戸についての聞き書き、水温調査などの結果を元に予備研究のまとめを作り、これからは他の谷戸の観察も行い、比較しながら、更に清水谷戸の生物相の観察も深め、できることならいつまでも、市民のオアシスとして、自然観察の場として残せるようにしたいとの願いをこめて八月三十一日の予備研究発表の場に望みましたが、どのような審判が下されるか、十一月の発表を待っています。

しかしコンクールに入賞する、しないは別として、一つの小さい地域について短い期間にこれだけの調査をしたことは大変勉強になりました。小、中、高生、社会人、家庭の主婦と巾の広い構成メンバーが、一つになって調査をしました。

また私達のグループには専門家が一人もおらず、植物担当のものは神奈川県植物誌調査会で勉強させて頂いた、三輪、齋木、齋藤の三名が中心に会員の皆さんの協力を得て行いました。専門家の方が見れば欠点だらけの調査でもっと良い方法があったかも知れません。試行錯誤を重ねながらですが、これからも続けて行きたいと思っています。それから、この素晴らしい自然をどのようにしたら、守って行けるかも、真剣に考えて行きたいと皆で話し合っております。(茅ヶ崎市 齋藤滋子)

## ● 「湘南植物誌」について

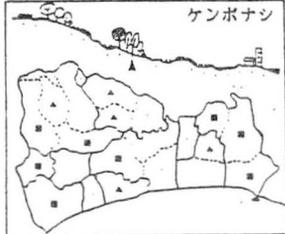
湘南ブロックの調査結果をまとめた「湘南植物誌」の第2号として雑弁花編が発行されています。分布図などは1号と同じ形式ですが、本文はワープロになったので少しイメージが変わりました。入手を希望される方は10

00円を添えて下記へお申し込み下さい。

〒254 平塚市浅間町12-41 平塚市博物館 浜口あて  
87年3月には単子葉およびシダ植物編が発行される予定です。

3. ケンボナシ *Hovenia dulcis* Thunb.  
山地、丘陵地に生える落葉高木。高地を除く全域に広く分布するが、少ない。葉の裏面は脈上にまばらに毛があり、花序や果実は無毛。6-7月に淡緑色の花をつける。コクサギ型葉序をしている。  
大井:83-6-11 赤田 山口10258; 小3:83-6-2 沼代△浜口10248; 粟2:83-8-8 養毛 守矢10247;  
粟4:79-6-1 柳川 佐々木10254; 粟5:82-6-2 西大竹 住吉10257; 伊1:82-5-19 子島 守矢10256;  
伊3:79-7-1 善波×守矢10250; 平1:79-7-12 土屋×浜口10253; 大磯:80-6-24 高屋 守矢10249;  
茅1:79-7-29 芦沢×樋田10252; 藤1:84-7-29 用田×根本・早川10243; 藤2:82-7-13 石川 松本10245;  
藤3:84-7-21 川名×根本15450;

4. ケケンボナシ *H. tomentella* Nakai  
前種によく似た落葉高木で、葉の裏は褐色の毛が密生してピロード状で、花序や果実も有毛。葉の鋸歯は低い。数例記録されたが稀で、人家近くなので、逸出したものかもしれない。前種同様、果柄が肥厚して甘い。  
中井:83-10-27 鴉沢 三輪10244; 粟5:80-10-19 尾尻 住吉10251; 平3:83-10-11 南原 浜口10246;



ケンボナシ



ケケンボナシ



ケンボナシ  
ケケンボナシ

## ● オールクリア寸前

以前本誌に浜口さんが湘南ブロックの全メッシュから記録された(オールクリア)の種を挙げられたことがあります。植物誌のデータもかなり充実してきて、全メッシュが比較できるようになってきました。そこで出現回数の多い種類をひろいだしてみました。108のメッシュのうち、箱根-3は芦ノ湖ですので、107メッシュから記録されれば、オールクリアと認められます。現在イタドリが106メッシュから記録され、オールクリア寸前となっています。以下出現メッシュ数の多いものを挙げておきます。

- 106: イトドリ
- 105: ヤマグル、ウツギ、フジ、ムラサキシブ、オオバコ、ニワトコ、フキ
- 104: ミズギ、カマズミ
- 103: イヌツバキ、ススキ、センソウク、タチツボ、スミレ、ヨモギ、ノコンギク、タイザンミ
- 102: スギナ、スズメノカタビラ、ホウチャクソウ、サルトリイバラ、ミツバ、アケビ、カマカ、モミジ、イソギ、ゲンショウコ、クサギ、ヘクソカズラ
- 101: トネツバキ、ミスズキ、ウツ、ミツバ、セイヨクタンポポ
- 100: ケシ、ケシ、シダ、カメヅクサ、イヌタデ、タケノコ、シロツメクサ、ツルクメド、マユミ、ノブドウ、アカネ、アマチャズル、ハルジオン、イワニガナ、ヤクソク (大場達之)

## ● アイノコクマワラビについて

アイノコクマワラビはクマワラビの雑種で、比較的できやすく両親種の混生地には大抵見つけることができる。本県でも各地から報告があり、証拠の標本が得られている。

アイノコクマワラビは両親種の形質を、いろいろな割合で受け継ぎ、従ってその表現もさまざま、非常にわかりやすい株から、わかりにくいタイプまでがある。一般的には雑種強勢で大形になることが多い。葉面の色は表裏とも両親種の間からややオクマワラビに近い色を示す。羽片、裂片はオクマワラビ的で、それにクマワラビの影響がさまざまに現れてくる。鱗片の形・色は中間のものが多く、ソーラスのつき方はオクマワラビ的でソーラスのついた羽片は縮小しないか、やや縮む。胞子は異常である。

以上のように、アイノコクマワラビはどちらかというオクマワラビに近い形のものが多いが、一方オクマワラビは変化範囲が大きく、一見アイノコクマワラビと思われるような株もあり、胞子を観察しないと安心できないような場合もある。従って、雑種の研究にはいろいろな面からの慎重な検討が必要になってくる。以下、参考までにアイノコクマワラビがどのようにして研究されてきたかを年代順に示しておく。

1. 1939年 伊藤洋 大日本植物誌 ウラボシ科オシダ亜科 1  
アイノコクマワラビの新和名をクマワラビの新品種として示した。(Dryopteris lacera O. Kuntze var. typica H. Ito form. intermedia H. Ito) オクマワラビに大分似ているとしているが、雑種とはいっていない。タイプ標本は示されていないが、著者等が検討の結果、東大にある伊藤洋採集の標本(1931.8.8. 高知県土佐山村)をそれに当てた。
2. 1952年 桧山庫三 ボタニカルノート(17) 野草 18巻 6号  
武蔵野に両親種の雑種があることを示し、和名にクマワラビモドキを提唱した。
3. 1954年 杉本順一・大村敏朗 静岡県シダ植物目録の追加 日本シダの会会報1巻13号  
野外観察の結果アイノコクマワラビ=クマワラビ×オクマワラビ(間種)であることを示した。
4. 1959年 田川基二 原色日本羊歯植物図鑑  
羽片・小羽片の形がクマワラビに似たオクマワラビの一型であろうとした。
5. 1961年 行方沼東・倉田悟 日本産シダ植物総目録クマワラビとオクマワラビの中間的なものとした。  
学名は Dryopteris lacera (Thunb.) O. Kuntze form. intermedia H. Ito を使用。
6. 1966年 杉本順一 日本草本植物総検索誌 シダ植物篇  
間種(クマワラビ×オクマワラビ)とし、学名は Dryopteris lacera×D. uniformis を使用。
7. 1967年 Kunio Mitui: Cytological and taxonomical studies on ferns (2). Dryopteris lacera and D. uniformis. Journ. Jap. Bot., 42:28-32.

染色体、胞子、気孔等を調べ、クマワラビが2倍体、オクマワラビが4倍体、アイノコクマワラビが3倍体で、これらは同質倍数性の関係にあるとし、3者の形態的差異は葉軸の鱗片の色と刺によくあらわれるとした。

8. 1968年 大谷茂 神奈川県羊歯植物(3) 横須賀市博物館研究報告 16  
横浜・三浦・鎌倉・丹沢・山北等の産地を示し、同補遺(1976)で産地の追加と学名の変更をおこなった。
9. 1969年 Haruki Hirabayashi: Chromosome numbers in Japanese species of Dryopteris(3). Journ. Jap. Bot., 44:85-96.  
東京八王子市恩方産の株を使用して染色体を観察し、アイノコクマワラビが $2n=123$ の雑種であることを示した。
10. 1970年 中池敏之 シダ雑種の索引  
学名に Dryopteris lacera×D. uniformis を使用した。
11. 1971年 Shunsuke Serizawa: Taxonomical notes on Asian ferns (3). Journ. Jap. Bot., 46:16-22.  
東京八王子市南高尾の榎窪沢で自身が採集した標本(no.1906, June 1966)をタイプとして記載し、分布域として本州・四国・九州を示した。学名を Dryopteris ×mituii Serizawa とし、以後この学名が一般に使用されている。タイプ標本は国立科学博物館の標本庫にあり、大変認識しやすい形である。
12. 1974年 Haruki Hirabayashi Cytogeographic studies on Dryopteris of Japan.  
両親種と共に染色体のスケッチ並びに分布図を示し、分布型が添えられている。
13. 1975年 Toshiyuki Nakaike Enumeratio Pteridophytarum Japonicarum Filicales  
これまでの論文が列挙されており、分布は本州のみがあがっている。
14. 1978年 大井次郎・中池敏之 日本植物誌 シダ篇  
分布域として本州(関東地方以西)・四国・九州があがっている。
15. 1982年 中池敏之 新日本植物市シダ篇  
生態として両親の混生する場所にそうまれではないことを示している。分布は同上。
16. 1983年 山本明 植物観察小記 野草 49巻 3号  
野外観察によりアイノコクマワラビのさまざまな型についてのべている。
17. 1985年 山本明・畑中喜秋・中池敏之 神奈川県厚木市上荻野におけるアイノコクマワラビの分類学的研究 国立科学博物館研究報告B類(植物学), 11:19-32.  
3者の混生地で葉の展開の様子、葉形、羽片、裂片、鱗片、胞子、気孔の形態等について一連の観察を行い新知見を述べると共に、タイプ標本の検討もおこなった。(山本明)

## ● 事務局から

去る12月20日に開かれた役員会で、植物誌刊行のおおよそのところが固まってきました。

刊行の期日: 1988年3月中旬  
原稿締切: 1987年9月末  
体裁: A4判 1000頁内外

すでにイノデ属、カナワラビ属、オシダ属、イグサ科、トウダイグサ科、キブシ科、ヤブコウジ科、アカネ科などの原稿が出来上がっております。2月くらいに城川先

生にシソ科をおまとめいただき、本印刷と同じような形式で印刷し皆様におとどけたいと考えております。

また年度末のチェックリストは昨年に引きつづき分布図集の双子葉類を予定しております。

前号から本誌を植物誌と同じA4判にいたしました。すこし大き過ぎて本欄に入らないとの声も頂いております。御意見お寄せ下さい。

本号は湘南ブロックに編集していただきました。